

## 教育および学習方法改善への取り組み —学び合い高め合う仲間づくり研修会の効果—

小林 久美\*・谷口幹也\*・伊豆千栄美\*・中村重太\*・中谷雅彦\*

\*九州女子大学人間科学部人間発達学科

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2010年5月27日受付、2010年7月14日受理)

### 要 旨

本研究の目的は、対人専門職を目指す本学科の大学2年生を対象に宿泊研修を行い、体験的学習機会を与えることによる効果を検討することである。また、学生主体として実施するにあたり編成した実行委員の対人専門職に必要とされるリーダーシップの育成効果も併せて検討する。

2年生を対象に、2009年11月28日、29日の1泊2日の「学び合い高め合う仲間づくり研修会」を実施し、その前後に、質問紙による意識調査を行った。実行委員については、研修準備段階や研修後に感想を任意で提出させた。

結果としては、以下のことが明らかになった。

- 1) 学生が期待していた以上に学生の研修への満足度は高かった。
- 2) 活動を体験することがその活動への興味を向上させた。
- 3) 約4割の学生が研修は有意義であるとした。その理由として、教員や上級生との交流の中でゼミ活動の話ができ、将来の進路を考えられたことがあげられる。
- 4) 実行委員の思いは、研修準備段階には不安や大変さを感じていたが、研修後には嬉しさや楽しさに変化した。
- 5) 実行委員は、仲間と協力し準備を進めており、そのことで得た達成感を感じていた。
- 6) 実行委員は、研修の企画運営を通して、自分の将来の展望を感じることができていた。

このように、これまで演習科目の少なかった2年生に対して、今回の研修を設定したことの教育効果は高かったといえる。また、実行委員も今回の研修を自分の将来の展望に結びつけることができおり、学生の対人専門職に必要な資質の向上に期待していた効果が見られた。

### はじめに

平成17年度に新設された九州女子大学人間科学部人間発達学科では、小学校教諭・幼稚園教諭・保育士など対人専門職の育成を目指し、4年間の教育課程に沿った活動はもとより、さまざまな取り組みを行ってきた。本学科は、平成20年度に第一期生の卒業生を送り出し

たが、今年度（平成21年度）は、4年間でふり返ると共に、新たに大学での体験的学習機会の拡大を図り、多くの視点から対人専門職を捉え、学生自身の明確な目標設定とその実現のためのプログラムを構築<sup>1)</sup>することを目的の1つにした研究が、平成21年度特別研究に採択された。

この特別研究の取り組みの一部として、教養教育を終え大学生活にも慣れた2年生を対象に宿泊研修を企画遂行することとした。これまで本学科では、時間割を作成しつつ大学での学びを考える研修「新入生学外研修」や、大学での学び方の基礎と対人専門職育成のための体験活動を取り入れた科目「基礎総合演習Ⅰ」と「基礎総合演習Ⅱ」を1年次に実施してきた。さらに、3年次と4年次には対人専門職育成に必要な専門知識を深め、卒業研究論文を作成するための科目「卒業研究演習Ⅰ」から「卒業研究演習Ⅳ」も教育課程に取り入れている。しかし、2年次にはこのような体験的な演習科目が設定されていなかった。そこで、この2年次に今回の研修を仕組むことで、4年間のプログラムの完成と教育効果が得られることを想定し、研究に取り組むこととした。また、その課程で、2年生のみならず上位学年における実行委員会を設置することにした。これは、行事の企画や運営をする立場を体験させることによる教育効果を検討するためである。

## 1. 目的

体験的学習の効果は、児童を対象にした研究<sup>2)</sup>から看護学生や大学生を対象にした研究<sup>3)~5)</sup>など多くの先行研究があり、ボランティア活動や自然体験を行う中で対象者の意識の変化があり、効果的であったとして報告されている。

本研究の目的は、対人専門職を目指す本学科の大学2年生を対象に宿泊研修を行い、体験的学習機会を与えることによる効果を検討することが目的である。それと同時に、大学3年生の一部の学生を対象に実行委員会を設置し、対人専門職において必要とされるリーダーシップの育成効果も検討していきたい。

## 2. 方法

### (1) 2年生を対象にした調査方法

演習科目が設置されていない2年生96名を対象に、2009年11月28日、29日の1泊2日で「学びあい高めあう仲間づくり研修会」を実施した。これまで教養教育科目を中心に学んできた1年間を終え、専門教育科目を多く学ぶようになった2年生の時期は、それぞれの将来の進路もより具体的に確定しつつある時期でもある。この時期は、同じ目標を持った仲間と同じ科目を選択するため、大学での多くの時間を同じメンバーで過ごしているが、より専門的に学んでいく3年次に移行する前に、もう一度自分や周囲を見つめ、将来に向けて何が必要なかを顧みる機会となることがこれからの学び方による影響を与えると推測した。そ

ここで具体的には「1：人と向き合う 2：自分と向き合う 3：今、自分に何が必要かを知る」の3つを研修の目的とし学生に示した。研修前と研修後の変化は質問紙で捉え分析する。質問紙の内容は、「研修への期待や満足」など8項目、「体験活動への興味」など4項目、「不安要素」3項目についてであり、4段階尺度評価で質問した。また感想を書く自由記述欄も設け、そこから今回の研修の目的を達成しているか否かをみるために、「人との関わり」「自分への気づき」「将来への展望」などの文脈を抽出し分析した。

## (2) 実行委員を対象にした調査方法

対人専門職において必要とされるリーダーシップの育成を検討するため、3年生を中心とした実行委員会を設置し、企画・運営に携わらせ、準備期間中および研修後の感想を提出させた。実行委員には、3年生17名と2年生4名が志願し、研修会の2ヶ月前から準備に取りかかった。対人専門職に不可欠である「生来的・環境的な人間性」(子どもへの愛情、職業的責任感、義務感、協調性、信念、社交性、統率力)<sup>6)</sup>の変化を見るために、実行委員の感想から「自分への気づき」、「人との関わり」、「将来への展望」などのカテゴリーで文脈を分析し、このような活動を遂行する過程での学生の意識の変化を検討した。

## 3. 研修会の行程

「学びあい高めあう仲間づくり研修会」は、対人専門職になにが必要かに気づかせる場面に遭遇させるために、また、対人専門職に必要な柔軟な対応のための知識を体感させるために、次のような5つの体験活動で構成した。

- ・グループワーク①では、キャンドルの集いのための衣装をビニールで作製する活動を設定した。
- ・野外炊飯では、薪割りや炊飯、カレーの調理を行って、それを夕食とした。
- ・キャンドルの集いでは、ビニールの衣装をまといレクリエーションを行うこととした。
- ・グループワーク②では、教員や学生相互の交流の場面を設定した。
- ・2日目の活動では、3つの体験活動(ネイチャーゲーム、ウォークラリー、表現遊び)のどれかを体験できるようにした。

グループでの協力、仕事分担、連帯感を感じさせるため、グループワーク以外の活動のすべてをグループ単位で行わせた。グループについては、学籍番号が並ばないように配慮し、2年生の人数を6名ずつ均等に分けて16グループを編成した。また、各グループに3年生の実行委員と教員を配置した。行程および活動の概略<sup>7)</sup>は、以下のようなものであった。

表1 研修の行程

11月28日(一日目)		
時間	内容	備考
9:00	集合	大学
出発、移動		
10:45	入所、打合せ	福岡県立少年自然の家「玄海の家」
11:00~11:30	入所式、オリエンテーション	集会室
12:00	昼食	食堂
13:00	講話	体育館
13:30~15:00	グループワーク① キャンドルのつどいの準備	体育館
15:15~	野外炊飯(夕食の準備)	キャンプ広場
(途中17:10 タベの集い(代表2名の国旗等降納))		
~18:45	夕食、後片付け	キャンプ広場
19:00~19:45	キャンドルのつどい	22:30 就寝、消灯
20:00~	入浴	
20:00~22:10	グループワーク② 自由討議	談話室、第5研修室、第6研修室
22:30	就寝準備	

11月29日(二日目)		
時間	内容	備考
6:30	起床、洗面、ベッド整理・部屋の清掃	
7:20	朝のつどい	つどいの広場
7:40	朝食	食堂
8:45	退所点検	
9:00~11:30	活動(3つのグループに分かれて活動) 1) ネイチャージャーゲーム 2) ウォークラリー 3) 表現遊び	ふれあい広場 施設敷地外 体育館、海岸
12:00~13:00	昼食	食堂
13:00~13:30	退所式	集会室

### 1) グループワーク① キャンドルのつどいの準備

カラフルなビニール袋やビニールテープ等を用いて衣装を作り、キャンドルの集いで行うシンデレラパーティの準備をした。グループで協力しあう場面ができるように、限られた用具で決められた時間内の製作とした。

### 2) 野外炊飯

野外炊飯の献立は、じゃがいも、人参、玉ねぎ、牛肉が入った定番カレーと米飯のみであったが、薪割りや火起こし、食器の熱湯消毒も行った。グループワーク①同様に、グループでの協力や仕事分担が必要になる。

### 3) キャンドルのつどい

グループワーク①で製作した衣装をまとってのシンデレラパーティーを実施した。身体を動かすダンスや歌などのレクリエーションをたくさん盛り込み、楽しい時間を設定した。このような楽しい雰囲気の中、学生相互の親睦を図り、学科の連帯感を高めることを期待した。

### 4) グループワーク② 自由討議

この研修の大きなポイントになるもので、教員や先輩との交流と友人との対話の中で、将来の夢や自分自身を見つめ直し、これからの学びを考える時間である。ここでは、個人の活動となり、各教員が控えている研修室に行き、自由に対話をするようにした。

## 5) ネイチャーゲーム

ネイチャーゲームとは、1979年、米国のジョセフ・コーネル氏により発表された自然体験プログラムのことで、いろいろなゲーム体験を通して、自然や環境に関心を持ち、その美しさや仕組みを学ぶことを目的としている。今回の研修では、ネイチャーゲームの講師を招き、講義を受けた後、実際にふれあい広場でいくつかのネイチャーゲームを実施した。

## 6) ウォークラリー

研修施設は、玄海の浜辺に隣接し、海岸や松林の遊歩道などの自然が多くある。ウォークラリーは、歩く活動を通して自然を楽しみながら「コマ地図」を使用し、グループで協力することや連帯感を感じる活動にした。なお、「コマ地図」とは、施設周辺のウォークコースにある交差点および分岐点だけを示した部分的な地図のことである。

## 7) 表現遊び

表現遊びでは、メンバー全員が協力し、カラービニール袋をつなぎ合わせ、巨大な作品を作製する。今回の作品はトトロで、黒のビニールで大トトロ、透明のビニールで中トトロ、水色のビニールで小トトロを作製した。袋状につなぎ合わせた巨大なビニールに顔をデコレーションし、浜辺で扇風機やドライヤーで空気を入れ膨らました。

## 4. 結果および考察

## (1) 研修への期待および研修後の満足感の変化

宿泊研修が行われることは、2年生に研修の約2ヶ月前(9月24日)に通知した。事前の質問紙調査を実施したのは11月9日で、研修の約3週間前である。対象者96名のうち回答得たのは74名であった。

研修への期待は、「①今回の研修は楽しそう」「②新しい友人ができそう」「③自分を知ることができそう」「④教員や先輩と交流ができそう」「⑤新しい知識が増えそう」「⑥研修は今後の学生生活の役に立つと思う」「⑦研修は将来の仕事に役に立つと思う」「⑧研修は有意義だと思う」の8項目の4段階尺度評価で探った。結果は表2の通りである。

表2 研修への期待

	1非常にそ う思う				2ややそ う思う				3あまりそ う思わな い				4まったく 思わな い			
	10.8				41.9				31.1				16.2			
①今回の研修は楽しそう	10.8				41.9				31.1				16.2			
②新しい友人ができそう	13.5				44.6				36.5				5.4			
③自分を知ることができそう	5.4				44.6				36.5				13.5			
④教員や先輩と交流ができそう	16.2				60.8				20.3				2.7			
⑤新しい知識が増えそう	17.6				60.8				17.6				4.1			
⑥研修は今後の学生生活の役に立つと思う	21.6				47.3				25.7				5.4			
⑦研修は将来の仕事に役に立つと思う	17.6				48.6				25.7				8.1			
⑧研修は有意義だと思う	18.9				39.2				32.4				9.5			

n=74

表3 研修後の満足感

	(%)			
	1非常にそ う思う	2ややそ う思う	3あまりそ う思わない	4まったく そう思わな
①研修は楽しかった	63.5	32.4	4.1	0
②新しい友人ができた	31.1	56.8	10.8	1.4
③自分を知ることができた	14.9	48.6	32.4	4.1
④教員や先輩と交流ができた	54.1	44.6	1.4	0
⑤新しい知識が増えた	45.9	48.6	5.4	0
⑥研修は今後の学生生活の役に立つと思う	48.6	47.3	4.1	0
⑦研修は将来の仕事に役に立つと思う	32.4	56.8	10.8	0
⑧研修は有意義なものであった	45.9	50.0	4.1	0

n=74

非常に期待されている項目は、「⑥役に立つ」であり、2割強の学生が「1非常にそう思う」と回答していた。「2ややそう思う」を合わせると「⑤新しい知識」の78.4%に次いで「④教員や先輩との交流」は、77.0%と高かった。一方、期待されていない項目としては、「①楽しい」と「③自分を知る」で、「4まったくそう思わない」と回答した学生は、1割以上で、「3あまりそう思わない」を合わせると約半数の学生がこの2項目に対して期待していないことが分かった。その他の項目については、結果から3割から4割の学生が期待していないことが読み取れた。

次に、研修後の満足感を探るための質問紙調査は、研修直後（11月29日研修最終日）に実施した。事後の質問は、研修への期待に対応させるため、事前同様の8項目を使用した（表3）。研修に参加した対象者77名のうち回答を得たのは74名であった。

すべての項目が研修前よりも高い割合になった。「1非常にそう思う」「2ややそう思う」のような肯定的な回答は、9割を超す項目が5項目も表れ、「4まったくそう思わない」の回答がなかった項目も表れた。特に、比較的期待されていなかった「①楽しい」の肯定的な回答は、95.9%になり、43.2ポイントも上昇した。肯定的な回答のポイント上昇数でいえば、「①楽しい」の次に「⑧有意義」が37.8ポイントも上昇する結果となった。

以上のように、今回の研修は学生が期待していた以上に満足度が高かったといえる。

## （2）体験活動への興味の変化

小学校教諭・幼稚園教諭・保育士など対人専門職には、専門的な知識や技能が必要であることは言うまでもないが、柔軟に対応できるように豊富な体験をさせ、それを通して学んでいくことも重要である。生活知や経験知が乏しいと言われている学生に、今回の研修で設定した体験活動を行わせ、前後の興味の変化を見てみる。

それぞれが行った体験活動の人数内訳は、野外炊飯74名、ウォークラリー20名、ネイチャーゲーム27名、表現遊び23名であった。なお、この人数は、アンケート用紙を提出した学生のみをカウントしたものである。

表4 体験活動への興味の変化

	(%)			
	1非常に好き	2やや好き	3あまり好きでない	4まったく好きでない
⑨私は運動が好きである	33.8	39.2	21.6	5.4
⑨私は運動が好きである (事後)	48.6	25.7	21.6	4.1
⑩私は料理が好きである	20.3	47.3	24.3	8.1
⑩私は料理が好きである (事後)	28.4	51.4	16.2	4.0
⑪私は自然が好きである	36.5	47.3	14.9	1.3
⑪私は自然が好きである (事後)	44.6	44.6	10.8	0
⑫私はもの作りが好きである	25.7	39.2	25.7	9.4
⑫私はもの作りが好きである (事後)	36.5	44.6	14.9	4.0

n=74

表4の通り、すべての項目で事後調査の方が各活動を好きであるという「1非常に好き」と「2やや好き」を合わせた回答率が高くなっている。「1非常に好き」の回答の上昇が大きかった項目は「⑨運動」で、14.8ポイントの上昇が見られた。肯定的な回答が10ポイント以上上昇した項目は、「⑫もの作り」の16.2ポイント、「⑩料理」の12.2ポイントであった。また、「4まったく好きでない」に着目すると、どの項目も体験後に減少しており、特に「⑪自然」においては0%になった。

さらに、これを活動別の参加有無で見ると表5のような結果となった。ただし、野外炊飯は全員参加しているため比較できないので除いている。

表5 体験活動別の興味 (事後調査)

	(%)				n
	1非常に好き	2やや好き	3あまり好きでない	4まったく好きでない	
⑨私は運動が好きである (不参加)	38.9	42.6	16.7	1.9	54
⑨私は運動が好きである (参加)	50.0	35.0	10.0	5.0	20
⑪私は自然が好きである (不参加)	45.1	41.2	13.7	0	51
⑪私は自然が好きである (参加)	44.5	48.1	7.4	0	27
⑫私はもの作りが好きである (不参加)	29.4	51.0	13.7	5.9	51
⑫私はもの作りが好きである (参加)	52.2	30.4	17.4	0	23

各活動は、体験者の方が「1非常に好き」「2やや好き」を合わせた数値が高くなっていた。特に「⑫もの作り」では、「1非常に好き」が22.8ポイントも高かった。今回の研修においても、活動を体験することがその活動への興味を向上させることが確認された。

### (3) 学生の不安の変化

学生が抱えている不安の項目がどのように変化するかを見るために、「⑬将来の進路について」「⑭これからの大学の授業について」「⑮人間関係について」の3つの項目を設定し、研修前後の回答を比較した(表6)。

表6 学生の不安の変化

	(%)			
	1非常に不安	2やや不安	3あまり不安でない	4まったく不安でない
⑬将来の進路	56.8	43.2	0.0	0.0
⑬将来の進路 (事後)	58.1	41.9	0.0	0.0
⑭これからの大学の授業	27.0	54.1	13.5	5.4
⑭これからの大学の授業 (事後)	23.0	59.4	17.6	0.0
⑮人間関係	16.2	35.1	35.1	13.6
⑮人間関係 (事後)	17.6	27.0	44.6	10.8

n=74

3項目とも変化が少なかったが、「⑮人間関係」においては、「1非常に不安」「2やや不安」の回答が研修後の方が6.9ポイント減少していた。これは、グループワーク②で教員や先輩との交流時に、多くの学生が来年度のゼミ分けを気にしており、話題となっていたためだと考えられる。教員らと十分交流できたため、逆に来年度のゼミ分けや将来の不安を具体的に感じることとなり、「⑬将来の進路」の項目の数値が改善できなかったのではないかと推察する。しかし、それは、この研修の活動や対話により、学生が自分自身を見つめ直し、将来の進路を真剣に考えたためによる不安とみられ、研修前の漠然とした不安とは質が異なると考えられる。したがって、この結果からは学生に対するこのような研修を引き続き提供していくことの重要性が示唆された。

#### (4) 自由記述 (感想) から

研修の感想として記述したものを分析した。感想を書いた学生は74名中66名 (89.2%) で、「想像以上に楽しかった」「疲れた」などの短いものから、紙面いっぱい記述している感想もあった。

これらの感想から「人との関わり」「自分への気づき」「将来への展望」が書かれたものを抽出すると以下のような感想があった。

##### 1) 「人との関わり」

- ・今までほとんど話したことのない人とも友だちになれて“なかま”が増えました！
- ・さまざまな場面で先輩たちに支えてもらいながら活動し、とても楽しい研修でした。
- ・みんなで力を合わせていろいろなものを作り上げたり、話したりと本当に楽しく、良い思い出になり、来てよかったと思いました。

##### 2) 「自分への気づき」

- ・将来について、まだ沢山考えなければならないことを実感できた。

##### 3) 「将来への展望」

- ・表現遊びでいろいろ分かったことや気づけたこと、先輩たちの凄いところなど、次は、自分が指導する立場になったときに生かしていきたい。
- ・ネイチャーゲームは初体験だったけど、楽しくて、将来、先生になったときに役立つと



思った。

- ・先生の話や先輩の話聞いて、将来への意識が高まった。

以上、いくつかを原文のまま紹介したが、「人との関わり」「将来への展望」は、紹介した感想と同様のものがいくつも見られた一方で、「自分への気づき」は、この感想1つだけであった。

次に、全ての感想から、もっとも多く読み取れたワードは、「楽しかった」であり、42名(56.8%)が記述していた。次に多かったのは、今回の研修がためになったと感じたワードで「有意義だった」「よかった」が、29名(39.2%)いた。その他にも「ゼミのことを考えることができた」が22名(28.2%)、「教員や先輩と交流できた」が18名(24.3%)、「新しい友人ができた」が16名(21.6%)いた。また、10名以下の記述としては、「将来を考えることができた」が9名(12.2%)、「不安が解消した」が5名(6.8%)、「(教育、保育)実習について理解できた」が2名(2.7%)あった。つまり、4割ほどの学生が、有意義であったと感じており、その理由として、教員や上級生との交流によってゼミや将来の進路を考える時間がもてたことであると推察できた。

一方、要望や不満が記述された感想もいくつか見られた。「時間にゆとりが欲しい」「疲れた」の内容が5名(6.8%)、「休みが潰れた」「代休が欲しい」の内容が5名、「内容を事前に知りたかった」が3名(4.1%)いた。1名ずつの感想として、「学校で行ってもよい」「暖かい時期にして欲しい」「休んだ人への課題はないのか」があがった。しかし、不満の感想のみを記述したものは4名(5.4%)に過ぎず、その他のものは概ね満足のいく研修だったと読み取れた。

その他、興味深い記述として、研修への満足感や不満だけではなく「計画してくれて、ありがとうございます。」「企画はどれも楽しかったです。ありがとうございます。」「先生や先輩のお陰で・・・」などの感謝の気持ちの記述が16名(21.6%)あった。研修に参加しながら企画者の立場を考えられる感想が寄せられたことは、将来、対人専門職を目指す学生が、自分自身と照らし合わせて多角的に研修の意味を捉えた成果の一つであるといえるであろう。

### (5) 実行委員の感想から

研修の企画、運営に携わった実行委員が、この研修を通して、研修準備初期、研修準備後期、研修後の3つの期間で、どのように変化していくかを感想から分析する。なお、実行委員の負担を考え、感想提出は任意とした。

21名の実行委員のうち感想を提出したものは、研修準備前期10名、先週準備後期7名、研修後10名であった。5名は、全ての期間の感想を提出し、8名からは1度も感想が提出

されなかった。感想の文脈を「自分への気づき」「人との関わり」「将来への展望」のカテゴリーに分けると、「自分への気づき」に直接関連するようなワードは見あたらず、自分の思いに関するものが見られた。例えば、「大変」「不安」「楽しい」「成功」「感動」「反省」などである。「人との関わり」に関するワードは「要望」「仲良く」「協力」などが見られた。「将来への展望」に関するワードは「しなければ」「したい」「役立つ」「学び」などがあつた。図1は、出現した各ワード数（延べ数）を提出した人数で除したものである。

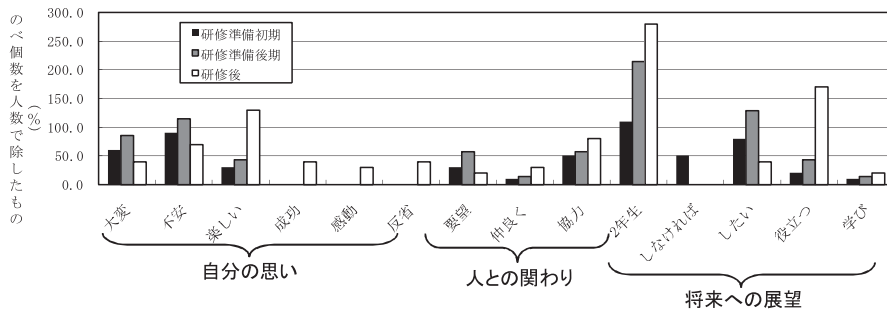


図1 キーワードの変化

1) 「自分の思い」では、「大変」「不安」などのワード数の出現が研修準備後期にもっとも多くなり、研修後には少なくなっている。逆に、「楽しい」については研修後の出現が多くなった。また、研修後のみに「成功」「感動」「反省」が出現した。具体的な感想としては、以下のようなものがあつた。

(研修準備前期)

- ・参加するのは当日の補助だけだと思っていただけど、企画から始めるので大変。
- ・今までこういう全体をまとめるような実行委員の経験がなく、正直不安でいっぱいです。
- ・どうやったら今回の研修会の目的を達成できるのかということを常に頭に置いて、活動内容を考えるのはとても難しいなと感じました。

(研修準備後期)

- ・あと少しで始まる研修会は不安な部分も大きいですが、とても楽しみです。
- ・当日2年生が楽しくやってくれるか心配です。
- ・分からないこともまだありますが、先生方の力も借りて、2年生に楽しんでもらえるようにしたいです。
- ・実際話し合いを始めると、あれもこれもって気になって、全体で何かをする計画を立てたり動かすということはやっぱり大変だなと思った。

(研修後)

- ・準備は本当に大変だったけど、それ以上に2年生が楽しそうにしている姿を見られて、

やってきて良かったと思いました。

- ・2年生が「来て良かった」「楽しい」とか言ってくれたのが、すごく嬉しかった。
- ・野外炊飯の時、2年生が「学外研修すごく楽しい！休んだ人達も来ればよかったのに」と言ってくれて、今まで頑張って来て良かったと思いました。

具体的な文脈を読み取ると、研修準備前期の何も分からない不安や大変さが、研修準備後期に具体的な不安に変化し、研修後には参加者の喜びを感じて嬉しさや楽しさに変化していることが分かった。

2)「人との関わり」では、「2年生」というワードが多く出現した。また、「仲良く」「協力」「2年生」のワードは、研修準備段階よりも研修後に多く表れた。また相手への「要望」は準備が進んだ研修準備後期がもっとも多かった。具体的な感想としては、以下のようなものがあった。

#### (研修準備前期)

- ・準備に関して全体でもう少し集まった方がいい。他のグループの準備状況などが分からないので、中間報告などが必要だと思った。
- ・これから残りの期間も研修実行委員で協力して、楽しみながら勉強になる研修にしたいと思います。
- ・最初は、なんでこんなことをするのか、はっきりとつかめないまま準備を始めました。しかし、準備をし、話し合うなかで、「何を2年生に伝えたいのか」「何を目的とするのか」が明確となってきました。

#### (研修準備後期)

- ・なかなか時間が合わず、話し合いができなく、バタバタでした。しかし、昼休みなどを少し使っても話し合う時間を見つけました。
- ・思った以上に準備や話し合いに時間がかかるので、とても大変だと思いました。
- ・ファシリテーターの先輩方がとても優しくしっかりしている方たちばかりで、アイデアが浮かばず困っていると、先輩方がアドバイスして下さったのでとても心強かったし、先輩方のアドバイスがあったからこそ、ここまで来られたのだと思います。

#### (研修後)

- ・ウォークラリーの準備は下見のために何度か玄海に足を運んだり、実際に歩いたりして大変だったけどみんなで協力したから成功できた。
- ・ファシリテーターのみんなと協力して今回の研修を成功することができて本当に嬉しかったし、ファシリテーターになってよかった。
- ・みんなで力を合わせたら造り上げることができる感動を味わいました。

- ・自分の担当のグループワークが上手く行くかと不安でしたが、予想以上に2年生がゼミのことや実習のこと等を真剣に考え、先生方やファシリテーターの先輩方に積極的に質問したりして、今の自分と向き合うことが出来ていたようだったので、良かったなと思いました。

具体的な文脈をみると、実行委員が仲間と協力し合い準備を進めている姿や、協力してきたことで達成したことを理解している様子がうかがえた。

- 3) 「将来への展望」では、研修準備初期に「しなければ」「したい」のような研修への遂行義務に関するワードが多く出現した。研修後には、「役立つ」のワードが多く表れた。具体的な感想としては、以下のようなものがあつた。

(研修準備前期)

- ・これから自分のためにも、学外研修に向けての準備を責任持って進めていきたいです。
- ・これから、司会進行の練習をしていきたいと思ってるので、2年生を私達3年生が援助できるように頑張っていきたいと思います。
- ・実際に目で見て足を運ぶなどして、準備を進めて行かなければならぬと思った。
- ・実行委員の仕事は、活動のめあてを考えたり、めあてを基に活動内容を考えたりと、将来、教員になるための良い練習になっているような気がします。

(研修準備後期)

- ・上手く行けばいいなと思いますが、失敗しても気を落とさず、その失敗経験を今後活かせるように努力したいなと思います。
- ・1週間しか時間はありませんが、準備を頑張つて良いものをつくりたいと思います。
- ・失敗しても思いっきり楽しみたいです。
- ・この研修に参加してよかったなつて思えるような研修会にしたいです。

(研修後)

- ・この学外研修は2年生の為のものでしたが、私たちファシリテーターも多く学ぶものがありました。
- ・今回この実行委員になつて様々なことを学ぶことが出来ました。プログラムの内容や2年生の行動を考えることの難しさを感じました。また準備の大変さも知ることが出来ました。
- ・この学外研修を通して下準備＝教材研究の大切さを身にしみて感じられたので、いい勉強になったと思います。
- ・何か企画することや準備の大変さ、みんなと協力したら1人ではできないことが、みんなで力を合わせたらできることのすごさを学びました。

具体的な文脈からは、初めから自分の将来、もしくは学びのために実行委員になることを申し出たものは少なかったことが分かる。準備段階では「頑張らなければ」「責任を持って」「したい」のような遂行への義務感や気力がうかがえた。研修の企画運営を通して経験した様々な事を、研修後には自分の将来の展望としてしっかり還元できていた。このように、研修の企画運営に実行委員を携わせたことは、リーダーシップを発揮できる対人専門職の育成に効果があったといえる。

## 5. まとめ

対人専門職を目指す本学科の大学2年生を対象に宿泊研修を行い、体験的学習機会を与えることによる効果を検討してきた。豊富な体験こそが、教師の資質（能力・態度・技能など）の習得や形成に影響を与えるが、まずは多種の活動に関心を持つことが第一歩である。2年生のアンケートからは、各活動の体験者の方が「1非常に好き」「2やや好き」を合わせた数値が高くなっており、活動を体験することでその活動への興味が向上していたことが明らかになった。また、研修に対する満足度は9割を超す項目が5項目もあり、事前のアンケート結果よりも「①楽しい」の肯定的な回答は、43.2ポイント、「⑧有意義」が37.8ポイント上昇しており、学生の研修への満足度は高かった。このように、各活動に関心を持つ学生が多くなり、研修も「楽しい」「有意義」と関心が上がったことは、先に述べた教師の資質の第一歩であり、この体験学習の教育効果であるともいえる。

次に、もう一度自分や周囲を見つめ、残りの2年間を将来に向けて何が必要なのかを顧みる機会が与えられたかについては、グループワーク②で教員や先輩との交流時に、多くの学生が来年度のゼミ分けについて気にし、話題となっていた場面があった。研修事前事後のアンケート結果を比較すると、学生の不安の変化に関する項目には変化が少なかった。しかし、この研修の活動や対話により、学生が自分自身を見つめ直し、将来の進路を真剣に考え、新しい具体的な不安を感じるようになったと読みよれる。自由記述にも同様に「教員や上級生との交流の中でゼミ活動の話ができ、将来の進路を考えられた」のような記述も見られた。どのように学び、何が必要かについては、明確に分からなかったかもしれないが、自分の将来を見つめ直す機会となったといえよう。

実行委員の対人専門職において必要とされるリーダーシップの育成效果については、実行委員の感想をキーワードから探っていった。「仲良く」「協力」「2年生」のワードは、研修準備段階よりも研修後に多く表れたことから、実行委員は、仲間と協力し準備を進め、そこで達成感を得ていることや相手（2年生）を思いやる気持ちが読みとれた。教師の資質に必要な「生来的・環境的な人間性」（子どもへの愛情、職業的責任感、義務感、協調性、信念、社交性、統率力）が企画運営に携わることで変化したのであろう。また、実行委員は、研修の企画運営を通して、自分の将来の展望を見出すことができたことが分かり、この研修の有

効性が明らかになった。

## おわりに

まとめて述べたように、これまで演習科目の少なかった2年生に対して、今回の研修を配置したことの教育効果は高かったといえる。また、実行委員も今回の研修を自分の将来の展望に結びつけることができている、学生の資質向上に期待していた効果が見られた。

最後に、2年生で実行委員を務めた学生の感想の一つに「研修会を終えてから、2年生のみんなの授業に取り組む姿勢が変わったし、みんなが仲良くなったように感じます。」との文脈があり、ゼミや将来の進路を考えたことが授業態度にまで影響を与えていたことも分かった。

## 謝辞

今回の研修にあたり、施設を利用させていただき、ご協力いただいた福岡県立少年自然の家「玄海の家」指導主事の稲垣浩俊先生をはじめスタッフの皆さま、並びにネイチャーゲームの講師としてご協力いただいた中間南中学校教頭で福岡県ネイチャーゲーム協会の猿渡清正先生および曾根ひかり幼稚園主任の篠田美登里先生に深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 中谷雅彦「現代に求められる実践的対人専門職を育てる基礎教育の構築」九州女子大学平成21年度教育・学習改善支援に係る特別研究申請書類、2009年2月
- 2) 向坊俊・城後豊「自然体験における学習の効果に関する一考察—プログラムの活動特性に着目して—」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第56巻第2号、2006年、pp.125-134
- 3) 寺山節子「ボランティアが及ぼす教育効果の実際—学生の主訴を中心に—」『中国学園紀要』2008年、pp.95-99
- 4) 西島大祐「幼児教育者の養成を目的とした組織キャンプの効果に関する一考察」『鎌倉女子大学紀要』第15号、2008年、pp.101-109
- 5) 伊丹君和 他「『未来看護塾』の活動および『人とかかわる体験』が看護学生へもたらす効果」『人間看護学研究』第6号、2007年、pp.49-61
- 6) 九州女子大学人間科学部人間発達学科『現代に求められる実践的対人専門職を育てる基礎教育の構築』平成21年度教育・学習改善支援（「特別研究費」教育・研究）、2010年3月31日
- 7) 九州女子大学人間科学部人間発達学科、同上報告書

## **Implementation for Improvement of Education and the Learning Method –The result of a workshop for making friends and raising the level of learning–**

Kumi KOBAYASHI\*・Mikiya TANIGUCHI\*・Chiemi IZU\*

Shigehiro NAKAMURA\*・Masahiko NAKATANI\*

\*Department of Education and psychology, Faculty of  
Humanities, Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka Yahatanishi-Ku Kitakyushu-Shi Fukuoka 807-8586 Japan

### ABSTRACT

The purpose of this study is to examine the effect of having second year college students receive training to support classmates and to give them experiences of learning opportunities. Also we want to examine the effectiveness of the executive committee who organized this workshop.

For the students, we arranged the overnight workshop from November 27<sup>th</sup> to 28<sup>th</sup>, 2009 and had them participate in a questionnaire after the workshop. The executive committee members were asked to submit their impressions concerning the preliminary stage and the period of the workshop after its completion.

As a result, the following became clear.

1. Satisfaction of the students concerning the workshop was higher than expected.
2. Participating in the activity motivated them to show interest in the activity.
3. About 40% of the students conveyed that the training was significant. The reason for this was due to the interchange with the teachers and upper-class students during the training which made them think about their future goals.
4. At first, the executive committee members felt uneasiness during the preparation stage, but this feeling evolved into joy and pleasure after the workshop.
5. The executive committee cooperated with each other in making preparations for the workshop and understood the sense of accomplishment after it was concluded.

6. The executive committee members were able to feel their future prospects by participating in the administration of this workshop.

It may be stated that for the second year students who do not have regular seminar classes, this workshop had a highly positive educational effect. In addition, by being able to see the improvement of the students through this workshop, the executive committee members could connect this training to their future teaching careers.